

アードルフ・オーバーレンダーと ミュンヘン・ビルダーボーゲン

宇佐美 幸彦

1. アードルフ・オーバーレンダー

アードルフ・オーバーレンダー¹(Adolf Oberländer, 1845-1923)は、1845年にレーゲンスブルクで音楽家(オルガン奏者)アードム・オーバーレンダーの息子として生まれた。2年後に父はミュンヘンの音楽大学に勤務することになり、一家はミュンヘンに移住した。しかし父は1852年に死去し、一家は経済的な困窮に陥った。アードルフは家族を養うという宿命のため、商業学校に入学した。しかし画家になりたいという気持ちを抑えることができず、17歳の時からミュンヘンの芸術アカデミーで学ぶことになった。アードルフは歴史画家として著名であったピロティ(Carl Theodor von Piloty, 1826-1886)のもとで画業の研鑽を積むとともに、18歳の時(1863年)から諷刺雑誌『フリーゲンデ・ブレッター』にイラスト作品を発表し、家計のために収入を得るようになった。この雑誌はブラウン・ウント・シュナイダー社から発行されていたが、やがて同じ発行所の「ミュンヘン・ビルダーボーゲン」にも多数の作品を発表するようになる。オーバーレンダーは出版社のすぐ近くに住居を構え、ほとんどこの出版社の専属画家のように、ほぼ60年にわたって多くの作品をこの雑誌に発表し、また同社から単行本として12冊もの画集(*Oberländer-Alben*, 1879-1902)を出版している。オーバーレンダーは、「ミュンヘン・ビルダーボーゲン」の中盤期の1867年から最終盤期の1898年まで30年以上にわたって、合計43の作品を制作し、「ミュンヘン・ビルダーボーゲン」の終盤期を支えたもっとも重要な画家の1人である。オーバーレンダーのビルダーボーゲン作品は次の通りである。

1 オーバーレンダーの生涯については、Ludwig, Hans: *Adolf Oberländer*, Berlin (Eulenspiegel Verlag), 1975を参照した。

版番号	タイトル	制作者	発行年
MU-00467	Am Billiard	Oberländer, A.	1867-68
MU-00488	Das naschhafte Kätzchen	Oberländer, A.	1868-69
MU-00503	Der Azori, oder viel Lärm um nichts	Oberländer, A.	1868-69
MU-00530	Der Kater und die Schlangen	Oberländer, A.	1870-71
MU-00536	Auf dem Eise	Oberländer, A.	1870-71
MU-00554	Vier Getränke	Oberländer, A.	1871-72
MU-00565	Ein Maskenball	Oberländer, A.	1871-72
MU-00572	Das Dilettanten-Quartett	Oberländer, A.	1871-72
MU-00586	Die Kaltwasserkur	Oberländer, A.	1872-73
MU-00597	Der Honigtropfen	Oberländer, A.	1872-73
MU-00601	Der Kirchthurmhahn	Oberländer, A.	1873-74
MU-00606	Das kleine Männchen	Oberländer, A.	1873-74
MU-00612	Die drei guten Tage	Oberländer, A.	1873-74
MU-00617	Das Kegelspiel	Oberländer, A.	1873-74
MU-00622	Das Schneiderlein und der Elephant	Oberländer, A.	1873-74
MU-00628	Die Rettung	Oberländer, A.	1874-75
MU-00631	Das Rattengift	Oberländer, A.	1874-75
MU-00637	Der getäuschte Feuerwehrmann	Oberländer, A.	1874-75
MU-00639	Der Bauer und die Maus	Oberländer, A.	1874-75
MU-00642	Das Gastmahl des Abedius Pollio	Oberländer, A.	1874-75
MU-00645	Der billige Affe	Oberländer, A.	1874-75
MU-00649	Die Käuzchen-Familie	Oberländer, A.	1875-76
MU-00652	Der Rollentausch	Oberländer, A.	1875-76
MU-00656	Wie es wär', wenn's anders wär'	Oberländer, A.	1875-76
MU-00660	Du sollst nicht neidig sein	Oberländer, A.	1875-76
MU-00664	Das Orchester	Oberländer, A.	1875-76
MU-00673	Die lieben Kinder	Oberländer, A.	1876-77
MU-00687	Der Hase und der Bauer	Oberländer, A.	1876-77
MU-00699	Der undankbare Sultan	Oberländer, A.	1877-78
MU-00702	Der ungenügsame Fritz	Oberländer, A.	1877-78
MU-00704	Ein jedes Thierchen hat sein Plaisirchen	Oberländer, A.	1877-78
MU-00706	Fürchterliche Rache an einer Katze	Oberländer, A.	1877-78
MU-00709	Der Elefant ist los	Oberländer, A.	1877-78
MU-00723	Böckerl und Pokerl	Oberländer, A.	1878-79
MU-00745	Der schlaue Zuckerbäckerlehning	Oberländer, A.	1879-80

MU-00750	Die betrunkene Gans	Oberländer, A.	1879-80
MU-00761	Der Straußenritt	Oberländer, A.	1879-80
MU-00779	Gedanken eines Laubfrosches	Oberländer, A.	1879-80
MU-00793	Der erste Versuch	Oberländer, A.	1881-82
MU-00845	Was der Mensch von den Tieren gelernt hat	Oberländer, A.	1883-84
MU-01011	Illustrierte Sprüchwörter, 1 .Bogen	Oberländer, A.	1890-91
MU-01012	Illustrierte Sprüchwörter, 2 .Bogen	Oberländer, A.	1890-91
MU-01200	Die Luftschiffer und die Eisbären	Oberländer, A.	1897-98

オーバーレンダーは、19世紀末にはヴィルヘルム・ブッシュと並んで最も人気のあったユーモア画家であった。ハンス・ルートヴィヒによれば、「あるいはブッシュよりもさらに人気があったかもしれない」²ほどであった。とりわけオーバーレンダーの描く動物たちは、人間的な特徴を備えていて、素朴なユーモアが多くの人々に愛されていたようである。

しかし20世紀になると、オーバーレンダーの絵は急速に忘れ去られていく。晩年の数年間には眼疾患のため、絵筆をとれなくなったオーバーレンダーは、1923年にミュンヘンで亡くなったのであるが、この時点では彼は完全に過去の人物となっていたようである。こうした事情の原因には、おそらく20世紀初頭のモダニズムの新しい波が、大きく作用しているものと思われる。本稿は、オーバーレンダーのビルダーボーゲン作品を具体的に観察し、その作品の特徴を明らかにするとともに、特にヴィルヘルム・ブッシュと比較して、ブッシュが今なお多くの人々に受け入れられているのに対して、オーバーレンダーがほとんど忘却の中に埋もれていった理由を探ることを試みるものである。

2. オーバーレンダー作品における動物たち

オーバーレンダーは動物を描くのがたいへん得意であったようで、彼の作品には頻繁に動物が登場する。全部で43作のビルダーボーゲンのうち、動物が主役となっていたり、筋の展開のうえで重要な役割を果たしていたりすると思われるものが23作ある。また部分的に動物が登場する

2 A.a.O., S.97.

ものを含めればほとんど大多数の作品ということになり、まったく動物が描かれていない作品は例外的存在である。

オーバーレンダーの動物は多くの場合、きわめてリアリスティックに描かれており、たいていは自己の利益を本能的に追求し、その結果、人間社会に損害をもたらし、またたいへんなトラブルを起こすなど、ネガティブな役割で描かれている。メッゲンドルファーの作品では、「プーデル犬」(MU-00787-Der Pudel)、「賢いミンカ」(MU-00911-Die kluge Minka)、「しっかりもののカーロ」(MU-01001-Der brave Karo) など³、人間を助けるイヌや、自分の子供が病気になると獣医のところまで連れていく母イヌが登場するが、そのような立派な行いをする動物はオーバーレンダーではまったく見られない。

(2-1) イヌ

まず身近な動物であるイヌが登場する作品を取り上げたい。「アツォルル、無駄な大騒ぎ」(MU-00503-Der Azorl, oder viel Lärm um nichts)⁴では子イヌのアツォルルが大騒動を引き起こす。アツォルルは盗んできたソーセージをベッドの下にもぐりこんで食べている。飼い主は「どうしてアツォルルがベッドの下に隠れているのか」と不思議がり、その妻は「最近私をにらむようになり、目つきがおかしかった。ひょっとして狂犬病にでもなっていたらどうしましょう」と言う。夫はすぐに獣医を呼んだ。獣医はベッドの下の暗いところでは診察ができないので、アツォルルに「出て来い」と呼びかけるが、イヌはウーウーとうなるばかりである。アパートの管理人を呼ぶと、危険だから皮剥ぎの親方を呼んだらどうかと言う。皮剥ぎの親方は、「イヌの顔つきが悪い、まずベッドの下から出さなくては仕事にならない」と言う。その時、アツォルルはウーウー、ワンワンと吠えた。居合わせた人々は一目散に部屋の外に逃げ出した。アツォルルは食事を済ませて、ベッドの下から出てきた。銃

3 拙稿「メッゲンドルファーとミュンヘン・ビルダーボーゲン」、関西大学『文学論集』。第64巻第4号、2015年、49ページ以下を参照されたい。

4 Münchener Bilderbogen, Nro.503, München, Braun & Schneider.

やピストル、ほうきなどで武装した人々が再び部屋に戻ってきたが、「アツォルの顔つきが優しくなっている。どこも悪いところはないのではないか」と言って、この話は終わる。

この作品では、イヌ自身はそれほど大きな犯罪行為をしたわけではない。ソーセージを取ってきてベッドの下で食べていただけである。大騒ぎになったのは、人間たちの過剰な反応である。些細な原因で大きな騒ぎが起こるのを面白く描いた作品であるが、読者はそれほど愉快的気持ちで笑えないのではないだろうか。実際にイヌが狂犬病になる可能性がある以上、飼い主や隣人たちは対策をとることが必要であり、そうした予防策を無意味であると笑い飛ばすことはできないであろう。

オスヴァルト・ジッケルトのミュンヘン・ビルダーボーゲン「ミュンヒハウゼン男爵の冒険」第2作（MU-00055-Die Abenteuer des Freiherrn von Münchhausen, 2 Bogen）⁵の中に、狂犬病のイヌに上着を噛まれ、その狂犬病を移された上着が、その後男爵の衣装室で、次々と別の衣服にかみつきの、男爵の衣装がすべてズタズタにされてしまったという荒唐無稽な話がある。このように上着が狂犬病となって、ほかの上着に咬み付くというジョークはフィクションとしてユーモアにあふれていると考えることができるが、オーバーレンダーの場合は、まったく現実的な設定から抜け出していないので、人々の過剰な反応を滑稽とすることはできないと思われる。

「救出」（MU-00628-Die Rettung）⁶にも、素朴で無邪気ではあるが、トラブルを起こすイヌが登場する。シュヴーデリヒ氏は暑いので、湖へ水泳に行く。服を脱ぎ、最近買ったばかりのイヌのブーツに「何も盗まれないようにしっかりこの上に座って番をしておけ」と命令した。シュヴーデリヒ氏が水泳を終えて戻ってきて、ふたたび服を着ようとする、ブーツは裸の男が自分の主人だということが分からず、唸り声を立てるばかりで、服を渡そうとしない。なだめすかしても、イヌは服か

5 拙稿「オスヴァルト・ジッケルトとミュンヘン・ビルダーボーゲン」、関西大学『独逸文学』。第58号、2014年、61ページ以下を参照されたい。

6 Münchener Bilderbogen, Nro.628, München, Braun & Schneider.

らどこうとせず、とうとうシュヴーデリヒ氏が腹を立てて、こぶしを固め、威嚇すると、イヌは主人に飛びかかり咬みつこうとした。辺りはもう暗くなりかけ、裸のシュヴーデリヒ氏は寒くて震え始めた。とうとうシュヴーデリヒ氏は名案を思い付いた。氏はブツツイが「アポルティールン」(犬の訓練で、狩りの獲物を取って持ってくることを想定して、木切れなどを投げて、それを持ち帰る練習)が好きであったことを思い起こし、一本の木切れを湖の中へ投げ、「さあ取ってこい」と叫んだ。ブツツイはこれを聞くと、飛び起きて、水の中へ突進していった。イヌが木切れを取りに行っている間に、シュヴーデリヒ氏は服を着て、イヌと飼い主は完全に和解して、家路についた。

いくら飼い始めたばかりだといえ、飼い主のにおいを認識できないイヌがいるのだろうか、という疑問もわくが、この話ではイヌが忠実に飼い主の命令を守り通したのであるから、ブツツイを性質の悪い動物とみなすことはできない。裸の飼い主が犬を説得しようとして、大げさな身振りでさまざまな試みをする姿は滑稽である。日常生活の中で、ちょっとした言葉づかいの食い違いからしばしば思いがけないトラブルが生じたりすることをオーバーレンダーは示したいのであろう。

「ねたんではいけない」(MU-00660-Du sollst nicht neidig sein)⁷でもイヌが重要な役割を果たす。カイル親方の家は裕福ではない。親方夫婦が、2人の職人、息子のペーター、2人の娘たちと食事をしている。わずかなロウソクの光の下で、親方夫人が出す食事は今日もジャガイモだけである。高価なバターはほとんど塗ってないと変わらない。息子は「ジャガイモだけか、バターもついてないのか」と嘆く。親方夫人は「こんなに大きなイモなのよ」と言い、親方も「このジャガイモはすばらしく新鮮だ」とジャガイモを取った。ペーターもジャガイモを取ろうとしたが、その時、ロウソクを倒してしまい、室内は真っ暗になった。親方夫人は、「ペーター、早く向こうから火を取ってきなさい」と言って、暗闇の中で誰かが勝手に取ってしまわないように、わずかなバターを入れた皿を机の下へ静かに隠した。ペーターが火を持ってきて、明るくな

7 Münchener Bilderbogen, Nro.660, München, Braun & Schneider.

ると、母親が驚いて叫んだ、「まあ、バターはどこへ行ったの。」しかしバターは跡形もなく消えてなくなっていた。ストーブの前で横たわっていたイヌが暗闇の中で、親方夫人がテーブルの下へ差し出した貴重なバターを食べてしまったのである。イヌは舌なめずりをし、おいしいごちそうに満足していた。

ロウソクも節約し、わずかな食事を我慢して食べている一家であるが、たいへん貴重なバターをイヌに食べられてしまう。イヌは意図的においしいごちそうを奪ったわけではない。暗闇の中でも、鼻が利くイヌは、親方夫人がテーブルの下で差し出した皿は自分のものと判断したのであろう。イヌが一番おいしいバターを食べたのであるが、そのことを誰も「ねたんではいけない」のである。よりもよって、貧しい人々から貴重な食糧が偶然のアクシデントによりさらに失われていく。それでも貧しい境遇の人々に、オーバーレンダーは「ねたんではいけない」と我慢を強いている。この作品には、ユーモアや滑稽さは感じられない。また貧困の解消に向かう将来の明るい展望もない。オーバーレンダーは貧困な現実をそのまま示すことによって、読者に問題提起しているのであろうか。

「最初の試み」(MU-00793-Der erste Versuch)⁸では生まれたばかりの子イヌが登場する。子イヌのアミはかごの中に入れられているが、目を覚まし、かごから出ようとする。かごから出たアミにとって外は自由の世界であった。アミはテーブルクロスにとびつき、その端を口にくわえ、ブランコのようにぶら下がって遊んでいる。とうとうテーブルクロスがずり落ち、テーブルの上の水差し、コップ、果物などが全部下へ落ちてしまった。びしょぬれになってアミはしょんぼりとかごに戻った。最後にオーバーレンダーがくわえる教訓は、「幼いうちには、一人で家を出てはならない」というものである。

好奇心にあふれた子イヌが、冒険に出て、テーブルクロスを落とし、上にあったものを破壊する。物的損害は生じたとしても、こうした子イヌの悪戯は無邪気なもので、目くじらを立てて叱責するほどのことでは

8 Münchener Bilderbogen, Nro.793, München, Braun & Schneider.

ない。作品の中でも、アミはびしょぬれになるという制裁を受けただけで、再び元のかごに戻っている。オーバーレンダーのビルダーボーゲン作品は多くの場合、破壊的な結末へと発展していくのであるが、この作品は無邪気な、たわいのない悪戯の範囲にとどまっている。

(2-2) ネコ

イヌに次いでネコもオーバーレンダーの作品では再三登場する。「甘いもの好きの子ネコ」(MU-00488-Das naschhafte Kätzchen)⁹では、子ネコのミーツェルルが甘いものが入っている壺を見つけ、蓋を鼻で押してこじ開け、中のものをなめ始める。壺の中のものをほとんど空っぽになるまでなめてしまっても、子ネコは足を伸ばし、首を壺の中へ突っ込んでなめ続ける。とうとう壺もネコもこけてしまい、もの音を聞きつけたおかみさんにミーツェルルは首をつかまれ、さんざんぶたれる。

壺の中に何が入っていたかは作品に述べられていない。甘いもの好きのネコがなめるものだから、おそらくシロップかジャムのようなものであろう。しかしネコの背丈とあまり変わらないような大きな壺の中身を空っぽになるまでなめつくすというのは、現実的ではなく、創作上の誇張なのであろう。この作品ではネコは旺盛な食欲という本能のままに行動し、鞭でさんざんぶたれるという処分を受ける。

「ネコとヘビ」(MU-00530-Der Kater und die Schlangen)¹⁰ではネコの好奇心が破滅的な結果をもたらす。東インド産のアシの茎で編んだかごがあり、その中には一つがいの大蛇(ボア)が入っていた。ネコのリップスはネズミのようなにおいがするので、前足であたを開け、頭を中に入れて偵察してみた。その途端にオスのボアがその頭にかぶりついた。メスのボアも負けじとネコのしっぽと後ろ脚に食らいついた。こうして怒りに任せた咬み付き合いとなり、ネコの体は引っ張られて長く伸びた。ボアはネコの両端から呑み込み始め、とうとうオスとメスのボアがお互

9 Münchener Bilderbogen, Nro.488, München, Braun & Schneider.

10 Münchener Bilderbogen, Nro.530, München, Braun & Schneider.

いに鼻を突き合わせるころまでできた。ヘビは歯が中へ曲がっている
ので、もはや後戻りすることはできなかった。力に勝るメスのほうがオス
の体も呑み込み始めた。しかしメスにとってもこれは楽しいことではな
かった。ネコとオスをすべて呑み込んだメスはとうとう消化不良で死ん
でしまった。オーバーレンダーは最後に、ギリシア7賢人の1人ピア
ス¹¹の言葉を引いて、「過ぎたることを避けるべし」とまとめている。

ネコのリップスは、部屋の中に置かれているかごの中に、まさか大蛇
が入っているとは夢にも思わなかったであろう。ネコの不用意な行動が
破滅をもたらすことになった。それにしても大蛇もお互いの本能をむき
出しにして、ネコを呑み込むことだけに夢中になり、結局はすべての動
物が死滅してしまう。この展望のなさ、画家の虚無主義を示している
のであろうか。動物たちは相手に食らいつき、相手を倒して、呑みつく
すという闘争本能しか持ち合わせていないのである。

「ネコへの復讐の恐ろしさ」(MU-00706-Fürchterliche Rache an einer
Katze)¹²に登場するネコのミーツイは、鳥かごを倒して、教授が飼って
いた小鳥を食べてしまった。教授はネコを捕まえようとするが、ネコは
部屋の中を逃げ回り、ランプが倒れて壊れてしまう。やっとのことでネ
コを捕まえた教授は、ブーツェルとツヴァックという2匹の犬に咬みつ
かせようとする。ネコは逃げ場を失い、とうとう教授の頭の上に飛び上
がる。ネコとネコを追ってきたイヌに教授はさんざんに攻撃され、その
後ネコは垣根の向こうへと逃亡してしまう。オーバーレンダーの教訓は、
「動物に復讐してはならない」ということである。

この作品でのネコはきわめて悪質である。教授の大事にしていた小鳥
を殺害し、懲らしめようと復讐を試みた教授をさんざん嘲弄し、結局は
逃げ去って処罰されることもない。教授にとっての損害は、小鳥の喪失、
ランプの破壊、ネコとイヌによって加えられた傷など、甚大なものであ
る。ネコを捕まえるときにドジな姿をさらし、最後には痛めつけられた
ままとする「教授」という存在を作者は嫌っていたのであろうか。確か

11 Bias von Priene (プリエネのピアス) 紀元前590年頃-530年頃。

12 Münchener Bilderbogen, Nro.706, München, Braun & Schneider.

に多くの場合大学教授は運動神経が鈍く、ネコの素早さにはとうてい付いていけないくせに、社会的地位が高いのでむやみに威張り散らしているものである。威張っていたり、すましていたり、きざな行動をする人物を取り上げて、その無様な姿を見せることは、一般の読者にとって溜飲が下がる思いがして痛快であろう。しかしオーバーレンダーの場合は、前述のカイロ親方のような貧しい家庭の人々もひどい目にあっているので、損害を受けたり嘲弄的になったりする人物は、必ずしも社会の上部でふんぞり返っている人とは限らないかもしれない。

(2-3) 大型動物 (クマ、ゾウ、ダチョウ、シロクマ)

大型動物たちは、破壊的な行動をするので、ビルダーボーゲンにはしばしば登場する。「仮装舞踏会」(MU-00565-Ein Maskenball)¹³ではクマが主役である。カーニヴァルの火曜日に大きな仮装舞踏会が開催される。7時になると、ロココ調の服装の令嬢やら、トルコ人の格好をした男性、スペイン風の騎士、道化の服を着た人たちが集まってくる。1人の男性が仮装したクマと一緒にやってきた。そのクマの毛皮は本物そっくりで、しぐさもまるで本物の動物のようであった。クマは後足で立ち上がり、楽しげに踊りだした。クマを連れて来た男はいつの間にか姿を消し、誰もその男がどういう人物であったかは知らなかった。しかしクマはスペイン騎士の胴着を爪でひっかけ、2人の男性のロココ風のマゲをつかんで振り回した。さらにクマはチロル風の格好をした男性をひとつらえて、ペーピ嬢のドレスを引き裂き、このため彼女はほとんど気を失いそうになった。こうした暴力的な振る舞いに舞踏会主催者もカンカンになって怒ったが、クマはテーブルクロスを引っ張り、食事や高価な食器を落として台無しにしてしまった。あまりのひどさに、人々は「仮面を取れ、仮面を取れ、警察を呼べ」と叫んだ。警官はすぐにやってきて、スペイン騎士らの勇敢な人々が勇気を出してクマを捕まえ、そのボール紙でできたクマの仮面を外した。ところが驚いたことに、中にいたのは本物のクマだったのである。人々はクマを警察署に引っ張っていき、3日間の

13 Münchener Bilderbogen, Nro.565, München, Braun & Schneider.

拘留ののち、素性もわからなかったので、クマはボヘミアの森へ運ばれた。舞踏会の参加者たちは、誰もクマに食べられなかったことが幸運だった、と言い合った。

カーニヴァルの舞踏会は羽目を外してどんちゃん騒ぎをする場所である。飲みすぎたり、騒ぎすぎたりすることは当たり前である。しかし仮面をつけクマの仮装をした人物と装って、ほんもののクマを舞踏会に連れてくるとは、あまりにも常軌を逸した行いであろう。人に危害を加えることも十分に想定できることであり、そのようなことは明らかに犯罪行為とみなされよう。オーバーレンダーはおそらくショッキングな場面を設定したかったのであろうが、しかしこのような明らかな犯罪行為に対して、この画家の対処の仕方は不十分であるように思われる。作品ではクマを連れて来た人物を誰も知らなかったとし、この犯罪行為の責任について、何の追及もなされていない。クマが警察に引っ張られて取り調べられているが、取り調べられるべきはクマを連れて来た人物であろう。後述のいくらかの作品でも、この画家は犯罪的行為をあまりにも軽視する傾向がみられる。未遂事件も含めて、殺害や窃盗という犯罪行為に対して、これを放置するという態度をとるのであれば、人間の社会的共同生活は成り立たないのではなかろうか。それともこの画家は、既成のルールを束縛と感じ、そうした束縛から逃れて自由に行動しようとするアウトロー的なニヒリストなのであろうか。

「配役交替」(MU-00652-Der Rollentausch)¹⁴では、本物のクマではなく、クマ役の男が重要な役割を果たす。フランスの演劇界では「クマ退治」という作品がたいへんな人気である。この作品では最終場面で猟師がクマと殴り合いをして、これを倒し、その死んだクマの上に乗って、猟師は美しい娘とその父親と勝利のテルツェットを歌うという演技がなされ、観客は歓声を上げ、拍手を送るのであった。あるイギリス人がこれを見て、下手な猟師が勝利し、いつもクマがやっつけられるのに腹を立てた。このイギリス人は金を積んではかりごとをし、秘密のうちにクマ役の男になって舞台に立った。最終場面の猟師との殴り合いの場面で、クマは

14 Münchener Bilderbogen, Nro.652, München, Braun & Schneider.

獵師を思い切りぶん殴った。観客は総立ちとなり、口笛を鳴らして騒いだ。クマ役の男はプロのボクサーで、舞台裏に逃げ込んだ獵師を再び舞台上に引きずり戻し、あばら骨、鼻、口に強力な打撃を加え、倒れた獵師の上にクマ役が馬乗りになって、勝利のアリアを歌った。

いつも同じパターンの筋の展開ではすぐに飽きが出る。平凡なものを打破し、新機軸を打ち出すことは大事なことであろう。しかしプロのボクサーが知らないうちにクマ役になっていて、それに打ちのめされる獵師役の人は何と悲惨なことだろう。たとえ芝居の中であっても、暴力によって人に危害を加えることは犯罪行為である。何か新しいことを打ち出すときには、芝居の筋書きやセリフ、あるいは演出法で工夫をして実行すべきであって、直接的な殴り合いという暴力でこれを実行することは問題であろう。暴力による現状破壊を示す、オーバーレンダーの設定には何らかの欲求不満が屈折して現れているのかもしれない。

「仕立屋とゾウ」(MU-00622-Das Schneiderlein und der Elephant)¹⁵ではゾウが復讐をする。この話の舞台がどこなのかは、作品の説明では何も語られていないので、不確かであるが、野生のゾウが住んでおり、建物にはイスラム教寺院の塔のようなものが描かれているので、アフリカかアジアの熱帯地方のどこかの国であろう。仕立屋が台の上に座って縫物をしていると、窓辺にゾウがやってきて、長い鼻を伸ばして室内にいる仕立屋をピシヤリとたたいた。仕立屋は腹立ちまぎれに針でゾウの鼻を突いた。ゾウは怒って仕立屋の首をへし折るのではないかと思われたが、後ろを向いて、去って行った。ゾウは水飲み場に行くと、渴きをいやし、さらに大量の水を口と鼻に含み、仕立屋の家に戻ってきた。ゾウは仕立屋に鼻から水を噴射し、部屋の中を洪水のように水浸しにした。あと1インチ水の量が多かったら、仕立屋は溺死していたであろう。

ゾウが仕立屋に鼻を針で突かれたのに怒り、水攻めにして復讐を果たしたという筋書きである。この作品にはオーバーレンダーの作為的な描写があるように思われる。まず野生のゾウが、針で突かれたときにすぐに復讐をせず、あとから水を汲んで乗り込んでくるということがありう

15 Münchener Bilderbogen, Nro.622, München, Braun & Schneider.

るのだろうか。ゾウの分厚い皮膚で、小さな縫物針がどこまで痛みを与えるのかは分からないが（鼻の敏感な部分であれば、反応するかもしれない）、そうした場合は、直ちに野生動物は反撃に出るのが普通ではなからうか。またいくらゾウの体が大きいからといって、部屋全体が洪水になるほどの大量の水を一度に運ぶことができるのであろうか。これらはいささか現実離れた、誇張した設定のように思われる。

「ゾウの逃走」（MU-00709-Der Elefant ist los）¹⁶では、サーカス小屋からゾウが逃げ出す。鉄道の線路や踏切番が出てくるので、舞台はドイツに設定されているようである。ゾウは逃げ惑う人々をよそに、サーカスを抜け出して、まず酒場に入る。酒場では、サーカスで見せていたように酒の瓶を鼻でつかんで芸当を見せるが、誰も拍手はせず、机やいすの下に潜り込んでしまった。それで退屈になったゾウは、鉄道の踏切番の小屋へ向かった。ゾウは小屋をひっくり返し、逆立ちの芸を見せ、そのあとで、逃げようとした踏切番の鉄道員を捕まえて、自分の背中に乗せるなど騒動を起こす。列車が近づいてくるが、ゾウはサーカスでやっていた芸のように、踏切番の旗を鼻で振り回し、列車は急ブレーキをかけて、線路に座っているゾウの手前で止まることができた。ゾウはサーカスでは空腹になると鐘を鳴らして合図をしていたのだが、ちょうど火災警報の鐘があったので、これを大きく振り回して鳴らした。火災警報が鳴り響くので、人々は走り寄り、消防隊も出動してきた。消防隊は警察隊と協力して、ゾウをとらえ、サーカスのゾウ係に引き渡した。この話の教訓は「常に義務を果たせ」と書かれている。

ゾウの大暴れによって生じた損害は、踏切番の小屋や信号機を壊したこと、列車の走行を妨害したこと、酒場の営業を中断したこと、消防隊や警察隊に特別な出動という負担をかけたこと、そして何よりも踏切番の男性を鼻でつかむなどして恐怖を与え、精神的苦痛を与えたことなどであろう。ところで「義務を果たせ」という教訓は誰に向けられているのであろう。踏切番も消防隊も警察隊も義務を果たしているのに、この騒ぎで義務を果たしていないのは、サーカスのゾウ係ということになる。

16 Münchener Bilderbogen, Nro.709, München, Braun & Schneider.

しかしこのゾウ係はこの話の展開部にはまったく登場せず、最後に捕まえられたゾウが引き渡されるときに登場するだけである。ゾウの騒動の展開部にふさわしい教訓は考えられなかったのであろうか。いくらか唐突な教訓のように感じられる。

「ダチヨウ乗り」(MU-00761-Der Strau benritt)¹⁷はアフリカの話である。アフリカでは馬の代わりにダチヨウに乗るということで、裕福な英国人のフォックス卿が乗ることになった。最初はすばらしい乗り心地で、フォックス卿は笑みを浮かべていた。ところがダチヨウは急に猛スピードで走りだし、フォックス卿は力を入れて止めようとしたが無駄であった。やっと木にぶら下がって止まることができたが、そこへゾウが突進してきた。フォックス卿は慌ててダチヨウにしがみついたが、しっぽのほうに向って座るという逆の座り方をしてしまった。ゾウには片方の長靴を奪われてしまい、ダチヨウはさらに走って、フォックス卿を大きな水飲み場の水の中に投げ落とした。この話の教訓は、「できないことをやろうとしてはいけない」ということである。

馬に代わって、ダチヨウに乗ることなどは、ヨーロッパ人にとってはたいへん珍しいことであろう。珍しいダチヨウとゾウを登場させ、アフリカの様子を紹介しながら、英国人の金持ちを滑稽な姿で描き、笑い飛ばすというのが、この作品の狙いであろう。しかしよく考えてみると、前述の「役割交替」では、これまでの決まりきったやり方を変えようとして、暴力に訴えてでも、現状打破の実現を図ったのであるが、これに対して、この作品では「できないことをやろうとしてはいけない」と、新しい挑戦を抑えるような態度を取っているわけであり、この二つの作品を見比べると、いささか矛盾するのではないだろうか。「新しいこと」と「できないこと」では、やや異なるかもしれない。だがダチヨウに乗るという挑戦はできるかどうかやってみないと分からないであろう。新しい挑戦をはじめから「できないこと」と決めつけてしまつては、これまで通りの行動を繰り返すより他に道がないだろう。

17 M nchener Bilderbogen, Nro.761, M nchen, Braun & Schneider.

「飛行船員とシロクマ」(MU-01200-Die Luftschiffer und die Eisbären)¹⁸ はオーバーレンダーが最後に制作したビルダーボーゲン作品である。飛行船に乗って2人のミュンヘンの探検隊員が北極へやってきた。着陸しようと錨を下したが、恐ろしいことにそのロープを2頭のシロクマがつかんで上ってくる。探検隊員たちは飛行船から飛び降りて、助かった。探検隊員たちが、錨のロープを断ち切ると、飛行船はシロクマを乗せたまま空高く飛び去った。3週間後にミュンヘンのテレージエンヴィーゼに何千人という人々が集まっている。空に大きな飛行船が現れたのだった。飛行船が下りてくるにつれ、人々は一層密に集まってきた。しかし飛行船から降りて来たのは怒りをあらわにしたシロクマの夫婦であった。最終画面では、飛行船から降りた2頭のクマが、集まった群衆に襲い掛かろうとしている様子が描かれている。群衆は驚いてクモの子を散らすように大騒ぎして逃げ去っていく。そこでクマの夫婦は北極への郷愁にとられる。一方北極では探検家の2人は「ホーフプロイハウス」¹⁹にさえ行くことができればいいのにとため息をついた。

北極探検隊の2人は北極の氷の上に取り残され、代わりにシロクマの夫婦がミュンヘンに戻ったという、まったくありえない話である。2人の探検家が飛行船を操って、北極に到達したことは、当時の技術水準からして可能なことであつたのであろう。しかしシロクマたちはどのようにして、ミュンヘンに戻るように飛行船を操縦したのであろうか。作品の中では述べられていないが、ミュンヘンに着陸したシロクマも、北極に取り残された探検家たちも今後どうなるかについての見通しはない。シロクマたちはミュンヘンでどうなるのであろうか。それよりもさらに心配なのは、北極に取り残された探検家たちである。飛行船から飛び降り、急いで錨のロープを切ってしまった探検家たちは極寒の気候に耐えるだけの装備と食料を持ち合わせているのであろうか。シロクマと探検家が入れ替わるという、まったく意外な、面白い設定をしたオーバーレンダーの大胆な発想は読者をハッと思わせる新規性をもたらすものであるが、実際にはありえない一種の法螺話であることは明らかである。ミ

18 Münchener Bilderbogen, Nro.1200, München, Braun & Schneider.

19 ミュンヘンの有名なビアホール。

ユンヒハウゼン男爵が豆の蔓を伝って月まで行ってきたと同じような類のフィクションなのであろう。

(2-4) その他の動物たち(ネズミ、サル、フクロウ、ウサギ、ガチョウ)

以上のほかにもオーバーレンダーの作品に登場する動物たちは多様である。「農夫とネズミ」(MU-00639-Der Bauer und die Maus)²⁰に登場するバルテル・ハンスは村の名士であったが、弱点もあった。彼はネズミが大の苦手であった。ネズミが増え続け、寝ているベッドの上にまでも現れるようになり、ハンスはネズミ捕りの罠をベッドの横に置いた。しかし彼がベッドで眠ろうとして目を閉じた途端、ネズミは大胆にも彼の顔にまで飛んできた。ハンスは飛び起きて、「今度こそ、やっつけてやる」とベッドの外へ乗り出した途端、ハンスは自分のつま先をネズミ捕りの罠に挟んでしまった。悲鳴を聞きつけてやってきた妻に罠を外してもらい、絆創膏を張って痛みを和らげてもらった。ネズミはその間にもベーコンに食らいつき、ハンスは「ネズミのすばしっこさにはかなわない」と降参する。

E. T. A. ホフマンの『くるみ割りとネズミの王様』でも、よりにもよって「衛生顧問官」の家にネズミの大群が押し寄せてくるが、19世紀のドイツでは多くの家庭でネズミの被害に苦しんでいたのであろう。オーバーレンダーの作品でも村の名士であるバルテル・ハンスでさえ、自分で仕掛けたネズミ捕りにつま先を挟まれ、悲鳴を上げる情けない始末である。もはやネズミにはお手上げという絶望的な状況がこの作品では示されている。

オーバーレンダーのもとではサルはまったくの悪者である。「安いサル」(MU-00645-Der billige Affe)²¹では、金持ちのマイアー氏がハンブルクでサルを売っている男から、「芸もできるサルがたったの10ターラー」と言われ、息子のフリッツのためにと買って買う。マイアー氏は10ター

20 Münchener Bilderbogen, Nro.639, München, Braun & Schneider.

21 Münchener Bilderbogen, Nro.645, München, Braun & Schneider.

ラーならほとんどただでもらったようなものと考え、サルを腕に抱えたが、サルは悪戯好きでさっそくマイアー氏の山高帽をペしゃんこにつぶしてしまった。マイアー氏は腹を立て、赤帽を呼んで、サルを運ばせたが、サルはこの運搬人の帽子を奪って、川に投げ込んでしまったので、マイアー氏は帽子代を2ターラー払わねばならなかった。ホテルに入るとサルは果物ののったテーブルに手を伸ばし、ホテル給仕の燕尾服を破ってしまう。マイアー氏はまた5ターラーの弁償金を払わねばならなかった。その後汽車に乗ると同じ車室に乗り合わせた婦人の巻き上げた鬘型の髪に飛び乗り、これをつぶしたので、マイアー氏は10ターラーを支払わねばならなかった。列車が停車したときにサルはサービスの給仕が持っていたハンパンに飛びかかったので、マイアー氏はさらに5ターラーを支払った。それでもマイアー氏は「サルを持って帰ればフリッツが喜ぶであろう」と自分を慰めていた。しかし、何ということだろう、サルは汽車の車室から逃げ去り、あっという間になくなってしまった。

マイアー氏は悪いサルのために、購入代10ターラーとその後のサルの悪戯の弁償として合計22ターラーを支払ったのであるが、結局、サルは逃げてしまい、すべて無駄遣いということになった。マイアー氏がサルの運搬に十分な配慮をせず、通りがかりの人々に対して悪戯ができるような状況にしていたこと、そして逃亡も可能な状況を作り出したことが、この無駄遣いの原因であろう。マイアー氏が多額の金を支払わねばならなかったことはその責任からして、いたし方のないことであろう。それにしてもこのサルは悪戯しかししない徹底的に悪い性格の持ち主として描かれている。これこそオーバーレンダーがリアリズム的に描く赤裸々な動物の姿なのであろう。

「フクロウ家族」(MU-00649-Die Käuzchen-Familie)²²ではフクロウの夫が木のくぼみにあるすみかの広さが十分でないので、しばしば飛び去って、家庭生活をかえりみない。それがフクロウの妻には面白いことではなく、ある朝午前4時にすみかの入り口にかぎをかけて、出はらっている夫が戻ってこられないようにしてしまった。激しい雨が降り始め、

22 Münchener Bilderbogen, Nro.649, München, Braun & Schneider.

フクロウの夫は急いで帰宅し、扉を開けてくれと叫ぶが聞き入れられない。雨に打たれ、フクロウの夫は妻の仕打ちを考えてみた。5時には仲たがいと仲直りについて話し合いがなされた。6時にはお互いに了解がなされ、木のくぼみにそれぞれの占める場所が見いだされた。教訓は「協調があれば、良い暮らしができる」ということである。

図版ではフクロウの家にかぎ付きの扉があり、妻が夜遊びする夫を中に入れられないというように、ほとんど人間の生活が反映されていて、たいへん愉快ではある。しかし妻の拒絶から仲直りまでの過程があまり説得力のあるようには描かれていない。どうして自分の家が狭いといつて、勝手に飛び出し、夜遊びばかりする夫を妻のフクロウは許す気になったのだろうか。話し合いの中身についてももう少し説得力のある説明があるか、夫の反省が明確な態度として示されない限り、読者は納得できないのではないだろうか。

「ウサギと農夫」(MU-00687-Der Hase und der Bauer)²³で登場するウサギは農夫を困らせるが、緊急事態によるやむを得ない理由によるもので、性格の悪い動物ではなく、むしろ賢明な動物として描かれている。川の水が急激に増水し、ウサギが逃げ場を失って、ただ1本残された大きな木の幹によじ登って避難している。これを見た農夫のクンツは、「あのウサギをもらったぞ」と言いつつ、岸から船を出して木のところまで漕いで行き、木によじ登った。追い詰められたウサギはクンツが木を登ってくる間にひらりと木の上からボートへとジャンプし、船に乗って逃げた。クンツは木の上に取り残される羽目となった (Abb.1)。

洪水という異常事態で、ウサギと農夫の緊迫した戦いが展開されるので、動きや緊張感が表現されていて面白いのではあるが、いくらか釈然としない点も見られる。増水して急な流れとなった川なのに、クンツはまるで静かな池でボート遊びをするかのように、悠然とボートを漕いでいる。しかも木に到着した後、そのボートを縛り付けもせず木によじ登り、ウサギにボートへ飛び乗って逃げるチャンスを与えてしまう。急流の川で農夫が木に登っている間、ボートが静止しているのはどうい

23 Münchener Bilderbogen, Nro.687, München, Braun & Schneider.

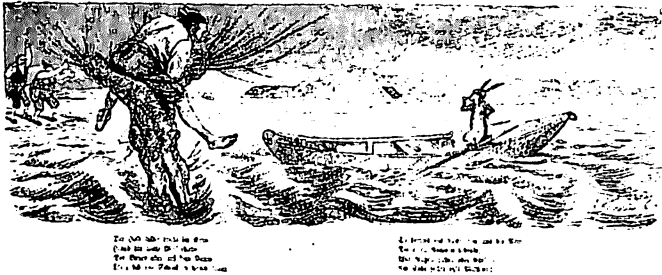


Abb.1: MU-00687-Der Hase und der Bauer 第6画面

わけなのであろう。最後の場面の図版を見ると、ウサギはボートの上で立ち上がり、クンツに向かってバイバイと手を振り、人間のようなしぐさをしている。これは動物を擬人化して描き、読者にオヤツと思わせる、異化効果的な演出なのであろう。

「酔っぱらったガチョウ」(MU-00750-Die betrunkene Gans)²⁴ではまぬけなガチョウが描かれる。大きな火酒の樽が横倒しになっており、そこから酒が漏れ出していた。そこへやってきたガチョウが地面に流れた酒を飲み、酔っぱらってしまう。ガチョウは上機嫌になって、笑いを広げ、陽気に大声で叫び、片足立ちする。とうとう池のほとりで大の字となって死んだように眠ってしまう。それをこの家の主婦のナニが発見し、大事なガチョウが死んでしまったと嘆き、涙を流しながら羽をむしり、焼き鳥にする準備をする。焼かれる寸前になって、羽をむしられたガチョウは正気に戻り、叫び声をあげて飛び上がり、逃げ出した。ナニは「神様、お助けあれ、死んだガチョウが生き返った」と驚いて叫ぶが、ガチョウは扉から外へと逃亡した。しかしガチョウは、追ってきたこの家の亭主とナニにととうとう捕まえられ、焼き鳥にされて食べられてしまった。

ガチョウがアルコール度の高い酒を飲み、酔っぱらって騒ぎ、寝込ん

24 Münchener Bilderbogen, Nro.750, München, Braun & Schneider.

でしまう姿は、人間の酔っ払いそっくりで滑稽である。おそらく動物が笑ったり酔っぱらって大声で叫んだりすることはありえないと思われるので、この酔っぱらった振る舞いは異化効果的な擬人化として描かれていると考えられる。また後半ではこの酔っ払いガチョウは羽をむしられ、たいへん醜悪な姿をさらしている。制作者はおそらく自戒を込めて、酒を飲みすぎないようにしようと、酒飲みたちにメッセージを発しているように思われる。

3. 権力者たち

人間社会を描くとき、ヴィルヘルム・ブッシュの描くビルダーボーゲンでは庶民の登場人物が日常生活の中で繰り広げる滑稽な場面や悪童が悪戯をするという話がほとんどで、権力者が登場することはまれであるが、これに対してオーバーレンダーの作品には権力者たちが重要な役割を果たしている作品がある。

(3-1) 「すばらしい3日間」

この作品（MU-00612-Die drei guten Tage）²⁵はメルヘン風な筋の展開である。無鉄砲で悪戯好きなムリヴェンツェルという風来坊がぶらぶら旅してある町にやってくると、人々が大勢集まって興奮して騒いでいる。何事かと思って聞いてみると、王女の高価な装飾品がすべて盗まれ、王様はお怒りになり、「王女の装飾品を取り戻し、盗賊を捕まえた者に王女を妻として与える」というお触れを町中に出したということであった。ムリヴェンツェルは、これはうまい儲けのチャンスだ、だめでもともとだから、と言って、王様のところへ行き、自分は大魔法使いできっと王女の装飾品を見つけ出してみせる、ただし3日間の猶予をいただきたい、と申し出た。王様はこれを聞くと喜び、ムリヴェンツェルを城のたいへん上等な部屋に通し、家来たちに、ごちそうを出して接待することと、城から逃げ出さないように見張ることを命じた。ムリヴェンツェルはカ

25 Münchener Bilderbogen, Nro.612, München, Braun & Schneider.

キヤキャビアなど、すばらしいごちそうを食べ、おいしい酒をたらふく飲み、控えている家来たちに向って、「さあこれで先ず一つ手に入れた」(So den Einen haben wir schon!)と言った。2日目にもムリヴェンツェルはまたもや贅沢なごちそうと最高級の酒をどっさりと胃袋に入れ、最後に家来たちに向って、「さあこれでもう一つ手に入れた」と言った。3日目には前よりもさらにどん欲に贅沢な飲み食いをし、椅子をこかすほどの勢いで立ち上がり、「さあこれで三つ目も手に入れた」と言った。これを聞くと控えていた3人の家来たちは、ひざまずいて、「ああムリヴェンツェル様、お願いします。私たちが王女様の宝物を奪ったことを白状します。ここにその宝物をお返しますので、どうか私たちが打ち首にされることのないようにお取り図らいください」とひれ伏した。「お前たちがおれに小遣いをたんまりくれるなら考えてもよいぞ」とムリヴェンツェルは答えた。こうしてムリヴェンツェルは王女の装飾品を王様のところへ持っていき、王女を妻とし、立派な結婚式が開かれた。そしてムリヴェンツェルはもはや放浪の旅をすることもなく、毎日、祭りの日のようなぜいたくな暮らしをすることができた。

ムリヴェンツェルが「一つ(Einen)手に入れた」と言ったのは、3日間の無銭飲食をしようとして、最初の日(Einen [Tag])を贅沢に暮らすことができたという意味であった。しかしこれを聞いた犯人のほうは、相手が何でも分かる魔法使いだという触れ込みだったので、自分たちの正体が一人(Einen [Mann])分かってしまったと思ったのである。そして3日目にはとうとう3人の犯行がばれたと観念して白状したのである。グリムのメルヘンでも、身分の低い者が王女あるいは王子と結婚するという結末を迎える話があるが、たいていの場合、それは本人がまじめに努力したり、勇敢さや聡明さという特別な才能を発揮したりした結果としてハッピーエンドとなるのである。これに対してムリヴェンツェルは王女を得るにふさわしい努力や才能を見せたのであろうか。魔法使いというのはったりと、偶然発した「一つ手に入れた」という言葉を相手が誤解したことで、幸運な地位を得たのではないのか。はったりとごまかして大きな幸運を得ることが許されているのだろうか。またオーバーレンダーは王女の高価な装飾品を盗んだ真犯人の3人の家来に対して、制裁を加えていない。窃盗という明白な犯罪行為が、多額の「小遣い」

(Trinkgeld) という賄賂で免罪されることを許していいのだろうか。この作品においても、ごまかしや犯罪に対して、これを軽視するオーバーレンダーの創作傾向が表れているという指摘がなされて当然であろう。

(3-2) ローマ皇帝

上記のムリヴェンツェルの話では、メルヘン風の設定となっているので、筋の展開において国王はそれほど重要な役割を果たしていない。しかし権力者が横暴な命令を下す作品もある。「アベディウス・ポリオの饗宴」(MU-00642-Das Gastmahl des Abedius Pollio)²⁶では古代ローマ時代の皇帝アウグストゥスが登場する。皇帝アウグストゥスは玉座に座り、あくびをし、退屈でたまらない様子である。そこへアベディウス・ポリオ男爵からの使いとして若い騎士がやってきて、立派なサケ(鮭)が手に入ったので、宴に招待したいと丁重に述べた。皇帝が約束の時間に、男爵の家に行くと、立派に飾った食卓に次々とおいしい料理が出された。皇帝がサケはまだなのかと催促すると、皇帝のところへ招待の使いをつとめた若い騎士がクリスタルの大きなガラスの皿に盛った巨大なサケを運んできた。しかしこの若い騎士はつまずき、200グルデンはすると思われる立派なクリスタルガラスを落とし、粉々にしてしまった。男爵は顔色を変えて怒り、「この馬鹿者をすぐに打ち首にしろ」と命じ、家来たちが若い騎士を取り押さえた。この若い騎士は皇帝の前にひれ伏して、「陛下、どうか私の命をお救いください」と懇願した。皇帝は「男爵はそちに何も危害を与えてはならない。そちは今から私の保護のもとに入るのだ」と言い、自分の家来たちを呼び集めた。そして家来たちに「男爵の家の中にある食器、クリスタル、陶器などすべて壊してしまえ」と命令した。テーブル上の食器類はすべて粉々にされ、台所や倉庫にある物、すべての部屋のあらゆる物が情け容赦なく破壊された(Abb.2)。男爵は雷に打たれたように立ちつくし、修道女のようにめそめそ嘆いた。しかし皇帝が一度決めたことに逆らうことはできなかった。皇帝は男爵に「人間の命とクリスタルの皿とどちらが大事か、よく考えてみなさい」

26 Münchener Bilderbogen, Nro.642, München, Braun & Schneider.



Abb.2: MU-00642-Das Gastmahl des Abedius Pollio 第7画面

と言って、馬車に乗って帰って行った。男爵は皇帝を見送りながら、「またサケが手に入ったら皇帝をすぐに招待しよう」と独り言をつぶやく。

人命を軽視して、失敗した部下を死刑にしようとした男爵はもちろん許しがたい人物であり、皇帝がそれをはっきりと指摘することは正しい態度であろう。しかしそれを示すために、客として招待されて来ている男爵の家のすべての調度品を破壊するというのはあまりにもやり過ぎではないだろうか。これほどひどいことをされた男爵が、何ら逆らってもせず、また皇帝を招待しようとするのは、皇帝の絶対的権力が不動のものという前提があるからであろう。男爵の人命軽視も問題であるが、皇帝の横暴な仕打ちを肯定的に描いているオーバーレンダーは絶対的な権力者には決して逆らうことができないと考えているようである。また食器類をすべて粉々に破壊しつくしてしまわないと気が済まないのは、この画家には自暴自棄的な不満を破壊行為によって解消したいというひそかな願望があるのではないかとさえ感じさせる。

(3-3) トルコのスルタン

「ありがたさのわからぬスルタン」(MU-00699-Der undankbare Sultan)²⁷ではとんでもない悪質な権力者が登場する。トルコのスルタン、メヘメト・ソーリマンは虫歯に苦しんでいる。スルタンは虫歯を抜いてもらおうと歯医者を呼ぶが、歯を抜くときの痛みが不安である。そこで歯を抜いた時の痛みがどれくらいであるか確かめようとする。黒人の奴隷が呼ばれ、

27 Münchener Bilderbogen, Nro.699, München, Braun & Schneider.



Abb.3: MU-00699-Der undankbare Sultan 第8画面

歯医者にその健康な歯を2本抜かせた。黒人はわずかな唸り声も出さなかった。そこへ国の宰相がやってきたので、今度はこの宰相が従順にも痛みの実験台となった。宰相は「全然痛みません」と言ったが、スルタンは満足せず、女性も試さねばならぬとして、ファティメの歯も抜かせたが、彼女は「たいして痛いことはありません」とほほ笑んで言った。こうしてとうとうスルタンは決意して歯医者に歯を抜かせることにしたが、歯医者が最初の歯を引っ張ると、「痛い、痛い」と悲鳴を上げ、歯医者をつき飛ばし、歯医者は20歩も飛ばされた（Abb.3）。スルタンは自分を騙して、歯を抜くことなど痛くないと言った黒人、宰相、ファティメと歯医者をつき飛ばし、打ち首の死刑とした。

黒人、宰相、ファティメの痛くもない健康な歯を、スルタンの都合で抜かせるだけでも、まったく非人道的で横暴な行為なのに、彼らの言ったことが嘘であったとして死刑にするなどは、まったく人命尊重の立場から外れた行為であろう。また治療にあたった歯医者が最初にスルタンの歯に触っただけで、死刑になってしまっているのだから、スルタンの歯の治療は終了していないのではないだろうか。4人の人命が奪われ、しかも虫歯も治療されず、何の解決もされていない。いったいどうしてオーバーレンダーはこうした横暴な権力者を描くのであろうか。ひどい権力者のもとでは、わずかなことで命を亡くしてしまうので、注意して生きるべしと警告しているのであろうか。それともこれほどひどい権力者もいるという事例を示すことによって、読者層に独裁者への反感を広めようとしているのであろうか。

4. 人間社会におけるいさかい

オーバーレンダーの描く多くの動物たちは、自己中心的で危害や損害しかもたらさない悪い性格のものであるが、彼の描く人間たちも善良な人はほとんどおらず、自己中心的、破壊的、偏狭という悪質な性格の人たちばかりである。

(4-1) 「アマチュア・カルテット」

この作品 (MU-00572-Das Dilettanten-Quartett)²⁸では、ヴァイオリンを演奏する音楽愛好家のペータース氏が土曜日にしろうとの弦楽四重奏を行おうと計画して、3人の友人を自宅へ招く。官僚のピーパー氏はヴィオラを、登記官のプフェークラム氏はチェロを、秘書官のバルドイーン氏は第2ヴァイオリンを担当することになっていた。音楽好きの4人はたいへんうれしそうに自慢の腕を披露し始めた。最初はたいへん調子よく滑り出した。ブラーヴォと拍手を送りたいほどであった。ところがチェロが傾いて、ペータース氏の足に強く当たった。ペータース氏はプフェークラム氏の頭をつかみ、「私はこうやってモーツァルトをとらえているのだ」と言った。ヴィオラ奏者は「あなたはモーツァルトなど分かっていないのだ」と面罵した。これを言われた男はすぐさまヴァイオリンの弓を相手にこすりつけた。バルドイーン氏も我慢の限界に達して、譜面台をひっくり返した。全員が殴り合いのけんかとなり、チェロには大きな穴があき、ピーパー氏は足を痛めて這わねばならなかった (Abb.4)。腹を立てて3人は帰っていく。ペータース氏は気分も落ち込み、



Was uns nach Christus gleich
 ist, ist uns auch gleich.
 Und wir die Gleichung sind
 die die Gleichung ist.

Es ist die Gleichung ist
 die Gleichung ist.
 Und wir die Gleichung sind
 die die Gleichung ist.

Abb.4: MU-00572-Das Dilettanten-Quartett 第7画面

28 Münchener Bilderbogen, Nro.572, München, Braun & Schneider.

「ハーモニーの芸術など習わなければよかった」とため息をついた。

音楽で大事なことは調和（ハーモニー）である。みんなで協力して作り上げるこの努力は、ののしり合い、そして直接的な暴力である殴り合いによって、台無しとなる。近代社会では人々が協調していくことが困難であることを、オーバーレンダーはこの作品で象徴的に示しているであろう。

（４－２）「冷水療法」

この作品（MU-00586-Die Kaltwasserkur）²⁹では窃盗という犯罪が発生する。年配の男性がリューマチのため冷水療法を受けている。頭以外はすっぽりと布にぐるぐる巻きに包まれ、手足の自由はきかない。ハエが顔にとまっても払いのけることさえできない。こうして長時間じっとしていることは耐えられないと思っていると、窓から２人の強盗が侵入してきた。彼らはピストルを構え、騒ぐなどと言って、ベッドの横に置いてあった上着やズボン、財布やネクタイなどすべてを奪い、再び窓から逃亡した。手足を拘束されて身動きできない被害者の男性は、逃げ出すこともできず、恐怖で声を出すこともできなかった。やっと盗賊たちが逃げ去ってから、大声で「泥棒だ、人殺しだ」と叫んだ。その声を聞いて、治療主任がやってくる。しかしこの主任は「窃盗については警察に届けることですな。しかしあなたは治療中なので、途中でやめることはできません」と言う。そして主任に体をもんだりさすったりしてもらい、治療を続行してもらおう。そして最後の治療が終わるとすがすがしい気分となる。

この作品ではリューマチの治療中に起こる窃盗事件が大きな山場であるのに、オーバーレンダーの筋書きの終盤ではリューマチの治療によって体が回復したことだけが述べられていて、泥棒の告発はどうなったのか何も書かれていない。ここにも犯罪行為を軽視するオーバーレンダーの傾向がみられる。被害者は物を取られ、泥棒は何のお咎めもなしということであれば、手足を拘束されているリューマチ治療室では、容易に

29 Münchener Bilderbogen, Nro.586, München, Braun & Schneider.

窃盗ができ、これを利用した泥棒たちはうまくやったと、犯罪行為を褒めているようなものではないだろうか。

(4-3)「蜂蜜のしずく」

この作品 (MU-00597-Der Honigtropfen)³⁰では、ほんの些細なことから大きな事件が発生する。猟師が犬を連れてなじみの商店へやってきた。昔からの友人である店のおやじに蜂蜜を持ってきて渡した。店のおやじが味見をして蜂蜜を置くときに壺を傾けたので、蜂蜜が一滴床に落ちた。一匹のハエがぶんぶん飛んできて、この蜂蜜をなめた。そのとき店のおやじのネコが飛び出してこのハエを捕まえた。するとこの猫を退屈していた猟師の猟犬が咬みついて殺してしまった。店のおやじは顔を赤くして怒り、猟犬を棒でたたき殺した。猟師はおやじに殴り掛かった。店のおやじは逃げだし、騒ぎは近所にも聞こえた。近所の人々は猟師に殴り掛かった。すると10人ほどの職人の若者がやってきて、大勢に囲まれて孤立している猟師に味方した。警察にも通報され、2連隊の警官が動員された。参加者は増え、嵐のような騒ぎとなった。次の日の新聞には「わが善良な町にも大暴動が起きた」という記事が載った。

ここに登場する人々は寛容の精神とは無縁である。腹を立てたら相手に暴力をふるう。また職人の若者たちは何ら腹を立てることはないのに、殴り合いをすることだけを自己目的として、争いに加わっている。ここに登場する人物たちの心はどうしてこれほど荒んでいるのだろうか。おそらくグリュンダーツァイト (泡沫会社設立時代) の資本主義発展で、人々の心においてはお互いに人間を尊重するという心構えが急速に低下し、不満な気分が蔓延しているのであろう。ところで、この作品におけるオーバーレンダーの結論部分の扱い方は正しいのだろうか。この結論から逆に考えていくと、革命騒ぎの大暴動というものは、蜂蜜のしずくのような、取るに足らないことから起きる無意味な騒ぎだということにならないだろうか。ここには労働者の貧困問題や、歴史的な労働運動に対するオーバーレンダーの無理解が示されていると思われる。すでに1844年に

30 Münchener Bilderbogen, Nro.597, München, Braun & Schneider.

シュレージエン地方では、貧困と過重な労働のため織工たちの暴動がおり、文学作品においてもハイネがこれを時事詩のテーマにしている。オーバーレンダーとほぼ同じ世代のゲルハルト・ハウプトマンもこの社会問題を取り上げて戯曲『織工』を書き上演した。貧困な社会層の実情、そしてその人たちの要求を正しく理解することは、いつの時代にも芸術家の責務ではないだろうか。労働者の運動を無意味なものにすり替えようとするこの作品はまじめな芸術とみなされないであろう。

(4-4) 「小さな男」

まったくのベテン師を登場させる作品もある。「小さな男」(MU-00606-Das kleine Männchen)³¹の主人公はたいへん背の低い小男で、おもちゃの人形ほどの背丈しかなく、常々、「もっと背が高かったなら」と願っていた。同じ町に、どんな治療でもできるという有名な「奇跡の医者」がいるということを知り、小男はこの「奇跡の医者」の所へ行き、「もし私の背丈が1インチ高くなったら、15ドゥカーテン払おう」と言う。相手は「1時間も時間をいただければ、きつとうまくなります」と言って、治療にとっても良い効果があるという薬草浴を用意した。小男は服を脱ぎ、風呂に入った。風呂から出ると毛布にくるまれた。1時間ほどすると再び服が持ってこられ、小男がこれを着ると、何という奇跡であろう、上着もズボンも丈が短くなっており、小男は「私は大きくなった」と喜んだ。それから医者に約束の金を払い、胸を張って通りを歩いた。しかし実はこれはまったくのでたらめであった。「奇跡の医者」は単なる仕立屋で、小男が風呂に入っている間に、上着とズボンを縫い縮めただけであった。

背が低い人の最大の望みを利用して、詐欺行為によって大金を獲得するという話である。しかも作品の中では、犯人は金を手に入れるだけで、何の制裁も受けていない。このようなベテン師がまかり通るこの作品は、まったく索漠とした、だまし合いの世の中を反映しているのであろう。

31 Münchener Bilderbogen, Nro.606, München, Braun & Schneider.

5. ユーモア

オーバーレンダーの表現方法は基本的に現実主義的であるが、時として現実とは裏腹の世界を描き、動物や人間の戯画を愉快地に展開する作品もある。こうした作品によりこの画家は大きな人気を獲得したのであろう。

(5-1) 非現実的的空想

「もしこんなことが本当だったら」(MU-00656-Wie es wär', wenn's anders wär')³²では現実とは異なる愉快的姿が図版で示されている。ここでは物語風の連続コマではなく、独立した16の画面が示されている。第1画面「アマガエルが口ひげを付けていたら、立派で楽しいではないか」、第2画面「牛が帽子をかぶっていたら、すてきで実用的ではないか」、第3画面「ガチョウが竹馬に乗っていたら、楽しい姿ではないか」、第4画面「オンドリがトサカではなく雨傘をつけていたら、すばらしいではないか」、第5画面「シカがフェルトのスリッパをはいていたら、獵もうまくいくだろう」、第6画面「ウサギが野原でトランペットを吹いていたら、かわいいではないか」、第7画面「ラクダがスケート靴を履いていたら、愉快ではないか」、第8画面「イノシシがティンパニー(太鼓)をたたくことができたなら、楽しいだろう」、第9画面「クマを門番に雇ったら、安くつくのではないか」、第10画面「キリンが皮のネクタイをしたら、皮屋さんは喜ぶだろう」、第11画面「ゾウが飛ぶことができたなら、面白いに違いない」(Abb.5)、第12画面「官僚たちがカスミを食べて生きることができたなら、国家に有用であろう」、第13画面「傷痕軍人が豚を手回しオルガンにできたなら、すばらしいではないか」、第14画面「カメがダンスすることができたなら、なんと上手なことと褒められよう」、第15画面「ワニが歌うことができたなら、ナイル河でも音楽がはやるだろう」、第16画面「女性が着飾って生まれてきたら、お金が節約できるだろう」(Abb.6)、というものである。

動物の滑稽な姿にも豊かな空想が込められていて、現実から離れた、

32 Münchener Bilderbogen, Nro.656, München, Braun & Schneider.



Abb.5: MU-00656-Wie es wär',
wenn's anders wär' 第11画面



Abb.6: MU-00656-Wie es wär',
wenn's anders wär' 第16画面

一種のさかさまの世界が示されている。しかしとりわけ傑作なのは、人間を扱っている画面であろう。第12画面で、官僚はカスミを食べていれば国家は助かる、とある。このことがあり得ない夢想だという設定は、現実には官僚たちは国家の甘い汁を吸ってばかりいるということを前提にしているわけである。官僚の実態に対する鋭い風刺である。また最終画面では、女性が生まれながらに着飾っていればお金が節約できるという説明があり、画面では扇子を持ってきれいに着飾った女性が描かれているが、その影はクジャクのような形をしている。クジャクのように美しい鳥は生まれながらに自然に美しさを備えているものであり、身を飾り立てるのに多額の金を使う必要もない。女性もこの世に生まれた時から美しく身を飾っていればお金を無駄に使うこともない、というのが画家の主張であろう。女性たちの華美や無駄遣いに対する強力な皮肉である。

(5-2) 動物たちの楽しみ

「どの動物にもそれぞれの楽しみがある」(MU-00704-Ein jedes Thierchen hat sein Plaisirchen)³³でも滑稽な動物たちの姿がユーモアたっぷり示されている。それぞれ独立した9画面があり、説明と画面を詳

33 Münchener Bilderbogen, Nro.704, München, Braun & Schneider.

しく見ると次のようになる（カッコ内は画面の概要）。

第1画面「サルは飼い主の手袋をはめて喜んでいる」（眼鏡をかけ、山高帽をかぶったサルが化粧鏡の前で大きな手袋をはめようとしている。鏡台の上には「夜会パーティー」の案内状が置かれている）（Abb.7）。

第2画面「オンドリはキャンパスの上で絵を描き、ご満悦である」（ニワトリが地面に敷かれた真っ白な画布の上をきたない足で歩き、足跡の模様をつけている。背景の奥のほうでは画家がキャンパスを立てて熱心に絵を描いている様子である）。

第3画面「オウムは力強くちばしで学問にかじりつく」（オウムが書斎の机の上の学術的な本をびりびりに引き裂いている、机の上にはフンボルトという大学者の肖像画が飾ってある）。

第4画面「ジョリは上靴と遊んでいるときが一番楽しい」（子犬のジョリが上履きの靴にかみつき破っている）。

第5画面「手入れの行き届いた花壇を踏み潰すのが牛にとっては楽しいことである」（花壇の花を大きな牛が踏み荒らしている、花壇の背後ではステッキを振り回して男性が怒っている）。

第6画面「ハチは農夫の鼻を花の中心だと思っている」（昼寝をしている農夫の鼻にハチがとまろうとしている）。

第7画面「犬は絶好の機会にソーセージを手に入れて喜ぶ」（壁の張り紙を熱心に読んでいる男性の外套のポケットからイヌがこっそりソーセージを盗もうとしている。張り紙には「すりに注意」とある）。

第8画面「馬車の馬は空腹になると造花にも喜んで食らいつく」（着飾った若い女性の頭を彩っている大きな造花の飾りに、うしろから大きな馬が首を伸ばして食いついている）。

第9画面「プッツの楽しみは他の人たちと声を合わせて歌うことである」（小さなコンサートのような場面で、男性の伴奏するピアノに合わせて若い女性が立って歌っている。イヌのプッツの吠え声が響くのであろう、4名の聴衆たちは女性歌手のほうを見ず、イヌのほうに首を回し、呆れたという顔をして見ている）（Abb.8）。

この作品のまとめとして、オーバーレンダーは、最後に、「動物たちの楽しみはあれこれと多様であるが、動物たちが楽しむことがいつもわれわれ人間に楽しいとは限らない。そしてその逆もまたその通りである」



Abb.7: MU-00704-Ein jedes Thierchen hat sein Plaisirchen 第1画



Abb.8: MU-00704- Ein jedes Thierchen hat sein Plaisirchen 第9画面

と書き記している。

これらの動物たちが繰り広げる楽しみで、人間も喜べるようなものがあるであろうか。オーバーレンダーの描く動物は人間に不利益をもたらすものばかりである。「逆もまたその通り」と、制作者が最後に述べているところからすると、人間たちも動物たちに被害を与えるだけであると、画家は考えているのであろう。結局、人間も動物もすべて利己主義的な振舞をするものだと、この画家は達観しているようである。

(5-3) 「人間が動物から学んだこと」

この作品 (MU-00845-Was der Mensch von den Tieren gelernt hat)³⁴でも動物と人間が戯画的に比較されている。全部で11の独立した画面があり、テキストと画面の概要は次のようなものである。

第1画面 (左上) 「オオカミはいつもこのようにする、貪欲の見本である」(2頭の狼が人間のように食卓の椅子に座り、おもちゃの羊にかぶりついている)。

第2画面 (左上から2段目) 「カエルがわれわれに水泳を教えたとい

34 Münchener Bilderbogen, Nro.845, München, Braun & Schneider.

うことは誰もが一致する見解である」(カエルが人間のように入泳パンツをはいて水泳場で泳いだり、水辺で足を組んで休んでいる)。

第3画面(中央上部)「サルは体操競技でわれわれの先生だ」(体操帽や体操服を身につけたサルたちが、大きな吊り輪につかまり体操競技をしている)。

第4画面(右上)「女性は虚栄心に満ちた飾り好きの性癖をきつと愚かなクジャクから学んだのだ」(鏡の前で大きなクジャクが立ち、左右に着飾るのを手伝う衣装屋さんの女性が世話をしている。その女性たちはスカートをはき、ハサミを持っているのだが、その顔はガチョウのような鳥である)。

第5画面(左上から2段目)「森の小鳥たちがきつと最初の合唱団を設立したのであろう」(森の中の大きな木にたくさんの小鳥たちがとまり、それぞれ譜面を持ちながら歌を歌っている)。

第6画面(中段左)「学生たちはしばしばナマケモノを見本としているのであろう」(学生組合の服を着たナマケモノがソファーに寝そべって、大きなパイプでタバコを吸っている、本は下に転がっている)(Abb.9)。

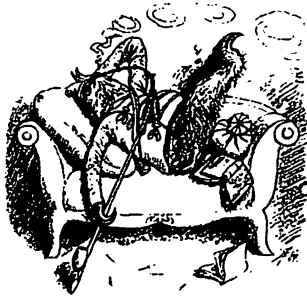
第7画面(中段中央)「人間は牛からボクシングを学んだに違いない」(2頭の牛がズボンをはいて立ち上がり、前足を相手に突き出してボクシングをしている)。

第8画面(中段右)「女の子たちはカメやビンから甘いものを盗み食いすることをネコから学んだのである」(スカートをはき、頭に大きな飾りのついた帽子をかぶり、背中には大きなリボンを付けたネコが、甘いシロップを入れたと思われる大きなカメに手を入れて盗もうとしている)(Abb.10)。

第9画面(下段左)「荷物運搬の見本はラクダが示した」(ラクダがポーターの服装をして大きな行李を背中に紐で括って乗せ運んでいる)。

第10画面(下段中央)「最初に盗みをした人間に模範を示したのはカラスだったに違いない」(カラスが泥棒のような黒いマントを着て、宝石箱の中から装飾品を盗み出していく)。

第11画面(下段左)「一目散に逃げ去ることは日ごろウサギが教えている」(獵師が背後で鉄砲を発射し、スーツを着た2匹のウサギが手前のほうへ逃げようと走っている)。



Nach folgt — nur etwas selbstbewahrter
Oft der Student des floultire Muller.

Abb. 9: MU-00845-Was der
Mensch von den Tieren gelernt hat
第6画面



Vom Röhlein lerret aus Topf und Nieschen
Das Mädchen überall zu niefen.

Abb.10: MU-00845-Was der
Mensch von den Tieren gelernt hat
第8画面

この作品では動物たちが示す例はすべて悪い性質のものとは限らない。確かにクジャクが女性に虚飾の手本を示し、ナマケモノが怠惰な学生の見本になり、カラスが泥棒の先例を示したりはしているが、小鳥やラクダは人間の娯楽や労働の見本となっているのである。それにしても服を着た動物たちの示す豊かな表情はオーバーレンダーの優れた感覚を示しているのではないだろうか。寝転がったナマケモノの学生や甘いものを盗もうとするスカート姿のネコの様子はまるでこのような人物がいるかのように面白く描かれているのではないだろうか。オーバーレンダーのもっともすぐれた作品として評価できるであろう。

(5-4) 「絵で見ることわざ」

「絵で見ることわざ」は第1部と第2部の2版にわたって発行された(MU-01011/01012-Illustrirte Sprüchwörter, 1-2.Bogen)³⁵。第1部と第2部にはそれぞれ11の画面がある。その内容は次のとおりである(カッコ内は画面の概要)。

35 Münchener Bilderbogen, Nro.1011/1012, München, Braun & Schneider.

第1部、第1画面 „Was ich nicht weiß, macht mir nicht heiß“ 「知らぬが仏」(男性がテーブルの前に座って横を向いている間に、ネコがテーブルの上の飲み物をなめている)。

第2画面 „Der Gescheidtere gibt nach“ 「負けるが勝ち = 賢いほうが譲歩する」(大きなガチョウが子犬のえさを独占し、小さな犬は退散するところである)。

第3画面 „Was Hänschen nicht lernt, lernt Hans nimmermehr“ 「何事も習うなら若いうち = ハンス坊やが習わなかったことを、大人になったハンスは決して習わない」(あまり勉強をしてこなかったと思われる、かなり年配の農夫が筆をとって字を書こうとしている)。

第4画面 „Wahl macht Qual“ 「選択の自由には苦勞がつきもの」(泥棒のような人物が塀を乗り越え庭木の上によじ登っているが、木の下にはブルドッグのようなイヌがおり、塀の外には銃を持った警官がいるので、どちらへも降りられない)。

第5画面 „Es ist kein Gelehrter vom Himmel gefallen“ 「生まれながらの学者はいない」(男性が目をごすりながらペンを持って勉強をしているが、紙の文字を見るとインクの染みが目立ちあまり勉強ははかどっていないようである)。

第6画面 „Blinder Eifer schadet nur“ 「短気は損気 = 見境のない熱意は損害をもたらすだけである」(男性がかっとなって大きな長靴脱ぎ器を野球のバットのように構えてネズミを退治しようとするが、机や椅子はひっくり返り、ランプや瓶が壊れ、大損害をもたらしている)(Abb.11)。

第7画面 „Wer auf zwei Hasen zielt, trifft keinen“ 「2兎を追うもの1兎も得ず」(猟師が銃を発射しているが、2匹のウサギは左右に逃げ、弾は外れている)。

第8画面 „Bange machen gilt nicht“ 「恐れているはだめだ = びくびくすることは意味がない」(高い塀の前で3匹の犬が飛びかかろうとしているが、塀の上にいるネコは平然としている)。

第9画面 „Es gehen viel' geduldige Schaf' in einen Stall“ 「おとなしい羊たちは一つの小屋に入るもの = 従順な人々は一つの方向に流されやすい」(サーカス小屋の観客席にたくさんの人々が密集し、全員真剣に演技を注視している)。

第10画面 „Wo nichts ist, hat der Kaiser das Recht verloren“ 「ない袖は振れぬ＝何もないところでは、たとえ皇帝でも何の権利も行使することができない」(飲食店で男性が食事を済ませたところである。店の主人が手を出して代金を請求しているようであるが、男性はからっぽのポケットを外にひっぱり出しており、金を持っていないようである)。

第11画面 „Viel' Köpff, viel Sinn“ (十人十色＝多くの頭があれば、多くの考えがある)(7人の人々が議論しているが、それぞれの人のさしている指の方向は全部異なる)。

第2部、第1画面 „Hunger ist der beste Koch“ 「空腹は最高の料理人、ひもじいときにまずいものなし」(高級そうなレストランのテーブルの上でイヌが上等な座布団の上に座っており、立派な服を着たウェーターが大きな皿にのせたソーセージを差し出しているが、イヌはそんなまずいものを食べるかと言わんばかりにそっぽを向いている)。

第2画面 „Vorsicht ist zu allen Dingen nütze“ 「何事にも用心するに越したことはない」(3匹のウサギが向こうにかかしが立っているので用心しているようである)。

第3画面 „Gleich' Unglück macht Freundschaft“ 「同類あい憐れむ＝同じ不幸にあった人たちは友情を結ぶ」(散歩中の男性と昆虫採集をしていたのか虫取り網を持った男性が、急な激しい雨の中で、わずかな屋根のある休憩所に入り、狭いので立ったまま雨宿りをしている。男性たちは手を握り合ってお互いを慰めているようである)。

第4画面 „Unverhofft kommt oft“ 「思いがけぬことはよくあるもの」(テーブルに座って、ワインを飲んでいる男性の頭を後ろから、突然、誰かがこぶしで殴りつけている)。

第5画面 „Lust und Lieb zu einem Ding macht alle Mühe und Arbeit gering“ 「好きなことにはどんな苦勞もいとわない」(2人の猟銃を持った狩りの愛好家の男性が、沼の中を苦勞して鳥のいる方向へ進もうとしている)。

第6画面 „Allzuviel ist ungesund“ 「過ぎたるは及ばざるがごとし＝過度なことは健康によくない」(子供がイスに座っておやつを食べている。おなかが膨らんで大きくなっているのに、まだ子供はおやつを手を取って口に運んでいる)。

第7画面 „Kleine Töpfchen laufen gern über“ 「小さな器はこぼれやす



„Jeder wehrt sich seiner Haut.“

Abb.11: MU-01011-
Illustrierte Sprüchwörter,
1 .Bogen 第 6 画面



„Jedem Narren gefällt seine Kappe.“

Abb.12: MU-01012-
Illustrierte Sprüchwörter,
2 .Bogen 第10画面



„Ende gut, Alles gut.“

Abb.13: MU-01012-
Illustrierte Sprüchwörter,
2 .Bogen 第11画面

い＝許容力のない人はすぐに感情を外に出す」(2人の男性が立っており、背の高い男は悠然と煙草をふかしているが、小男のほうはこぼしを固め怒り狂っている様子である)。

第8画面 „Jeder wehrt sich seiner Haut“ 「誰もがわが身を守るのに必死となる」(小鳥の巣に人間の大きな手が伸びてきている、小鳥はくちばしを立てて必死の抵抗をしている)。

第9画面 „Jedem Narren gefällt seine Kappe“ 「どんな阿呆〔道化師〕にも自慢するものがある」(3人の道化役の男が自分のかぶった帽子をひけらかしている)。

第10画面 „Irren ist menschlich“ 「過ちは人の常」(学者のような男性が、書斎の机の前で出かけようと上着を着ているが、どうもそれは上着ではなくズボンに腕を通してようである。また右足は長靴で左足は短靴が用意されている)(Abb.12)。

第11画面 „Ende gut, Alles gut“ 「終わりよければ、すべてよし」(老人が手紙のような書類を書き終えたところだが、最後にインクをこぼしてしまい、せっかく書いた書類は台無しである)(Abb.13)。

この作品を、同じように慣用的表現を面白く扱ったカール・シュタウバーの「決まり文句」(MU-00189/190-Redensarten, 1-2.Bogen)³⁶と

36 拙稿「カール・シュタウバーとミュンヘン・ビルダーボーゲン」、関西大学『文学論集』、第63巻第4号、2014年、39ページ以下を参照されたい。

比較してみると、シュタウバー（とりわけ第1部）は、通常の間人から大きく逸脱した常識外れの道化師（ハンスヴルスト）を登場させ、慣用句を捻じ曲げて滑稽に逆の意味に曲解することにより、しばしばグロテスクな異常事態を示しているが、これに対してオーバーレンダーの場合は写実的な描写で、日常的に一般社会で見られるような光景が描かれている。したがってシュタウバーのようなインパクトはオーバーレンダーには欠けているが、それでもこの作品は人々がよく使うことわざを面白く紹介していると高く評価できよう。ことわざは人の失敗への警句だったり、教訓であったりするので、そこには人間活動の滑稽な部分が凝縮されているのである。そのため、ことわざをとりあげ、それを分かりやすい絵で示すことは読者に大きな作用を及ぼすものなのであろう。

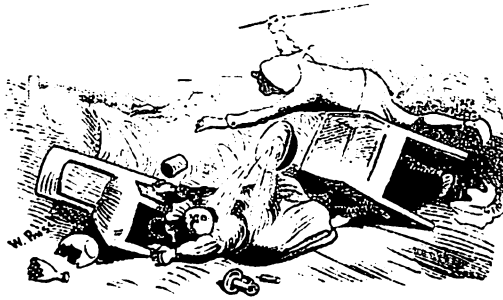
6. ブッシュとオーバーレンダー

オーバーレンダーとブッシュの作品のうち、共通あるいは類似した題材が取り扱われているケースを選び、両者の特徴と相違点について観察したい。

(6-1) ネズミ

まずオーバーレンダーの「農夫とネズミ」(MU-00639-Der Bauer und die Maus) (1874-75年)とブッシュの「ネズミ」(MU-00278-Die Maus) (1860年)³⁷を比較したい。どちらも住民が寝ているときに、ネズミが寝室に現れ、住民はこれを退治しようとして、大きな騒動となるが、結局、ネズミは逃げ去り、住民は大きな損害を被るという話である。状況の設定としては、オーバーレンダーのバルテル・ハンスは村の名士とされ、一人でベッドに寝ており、あとから悲鳴を聞いて、他の部屋から妻がかけつけ手当てするのに対して、ブッシュのフィッシャー夫妻は普通の一般庶民で、夫婦は同じ部屋でベッドを並べて寝ているという違いはあるが、ストーリーの展開において、2つの作品の間にそれほど大きな違いはない。しかし表

37 Münchener Bilderbogen, Nro.278, München, Braun & Schneider.



„Ach Herr Je! jett gebt Alles zu Grund!“

Abb.14: MU-00278-Die Maus (Wilhelm Busch) 第11画面

現方法に注目すると、①ダイナミックな動きの追及、②最終場面の機知にとんだしゃれ、という点でブッシュのほうが数段優れた技法を示しているように思われる。ブッシュは 全12コマのうち8コマを使って夫婦がネズミを追いかける動きを展開する。夫は鞭を持ち、妻は雨傘を持ってベッドの下や上を飛び回るネズミをとらえようと滑稽な姿を示す。しかも最後にはネズミに指を噛まれ、机やいすが倒れ、ネズミを殺そうとした熱湯が妻の上へぶちまけられ大惨事となる (Abb.14)。この様子をブッシュは夫婦の体や手足の動きをたくみに描き、運動と変化を上手に表現している。

これに対してオーバーレンダーでは、同じく全12コマのうち、主人公の紹介やネズミの被害についての一般的説明が前半部分で何コマも続き、ネズミの出現から自分で仕掛けた罠にはまるまでは3コマしかなく、ネズミを退治しようと起きたとたんに、主人公は罠にはまっている (Abb.15) ので、ネズミを追いかけて走り回るといふ動きを示す場面はなく、全体に描画が静息的である。動きや変化を示すためにはいくつかの場面を連続、対比させ、身振りを変化していくことが必要であろう。この点でオーバーレンダーは不十分であると言わざるを得ない。

第2点の「落ち」であるが、ブッシュのネズミは、「それではフィッシャー夫妻、謹んでごきげんようのご挨拶申し上げます」というセリフをしゃべり、人間のように手を振って去って行こうとしている。しかも



Der Herr bringt eine Maus (aus)
„Ich hab' die Mäus ganz geforscht in
mein Kistchen, mit der grünen Zeit“
Zitat in der Zeitschrift „Der Kunstler“

Abb.15: MU-00639-Der
Bauer und die Maus 第10
画面



„Ich hab' die Mäus mich ganz geforscht in
empfehlen Herr und Rabame Fischer!“

Abb.16: MU-00278-Die
Maus (Wilhelm Busch) 第12
画面

ネズミの表情は笑っているようである (Abb.16)。こうした描き方がブッシュの異化効果的なユーモアなのである。ネズミはさんざん騒動を起こしたあげく、ご丁寧な挨拶を「しゃべって」、人間のようにふるまうのである。このような終わり方を「ポアンティールング」(しゃれた落ち)というのであろう。これに対してオーバーレンダーの場合はきわめて写実的な描き方である。ネズミは何も言わず、テーブルの上の皿にのった大きなベーコンに食らいついており、奥のほうでバルテル・ハンスが「ネズミのすばしっこさにはかなわない」と降参の言葉を述べるのである。こうした描写はやや平凡で、ブッシュの落ちの鮮やかさと比べると見劣りがすると言わざるを得ない。

(6-2) 虫歯

次に、虫歯を扱った、オーバーレンダーの「ありがたさのわからぬスルタン」(MU-00699-Der undankbare Sultan) (1877-78年) とブッシュの「虫歯」(MU-00330-Der hohle Zahn) (1861-62年)³⁸を比較してみたい。前述のように、オーバーレンダーのスルタンはきわめて横暴で、抜歯す

38 Münchener Bilderbogen, Nro.330, München, Braun & Schneider.

ときの痛みを知ろうとして、3名の人の悪くもない歯を抜かせ、歯医者が自分の歯を治療しようとする、とても痛がって、自分を騙したと言って3人の実験台となった人たちと歯医者者を死刑にしてしまう。これに対して、ブッシュの作品では、歯痛に苦しむのは、フリードリヒ・クラッケという平凡な一般市民で、妻が歯を温めたらどうかと言うので、ストーブに顔を当てて温めても痛みがなくなるので、妻を棒でたたこうとする場面はあるが、クラッケが人を殺そうとすることはもちろんない。クラッケはタバコを吸ったり、焼酎を飲んだり、水で顔を冷やしたり、ストーブで温めたり、絆創膏を張ったり、汗をかけば治るかもしれないと、何枚もの重ねた布団の中にもぐりこんだりするが、まったく痛みはなくなる。ようやく夜が明けるのを待って、歯医者に行き、手荒い方法で歯を抜いてもらい、やっと歯痛から解放されるのである。

同じ虫歯を扱っているが、舞台の設定でも、筋の展開でも、描写方法でも両者はかなり異なっている。①まず舞台の設定と筋の展開であるが、オーバーレンダーは独裁的な権力者の横暴を示すことに主眼を置いているのであろう。前述した皇帝アウグストゥスの場合もそうであるが、この画家は絶対的な権力は不動であると考えているようである。権力者が言い出したことに逆らうことはありえないのである。ブッシュのビルダーボーゲンでは、権力者が登場することは例外的であるが、登場したときには絶対的権力者には批判的な態度が示されているように思われる。たとえば「後宮からの誘惑」(MU-00439-Die Entführung aus dem Serail)³⁹(題名はモーツァルトのオペラと同じだが内容は異なる)では次のような筋の展開となっている。番兵に酒を飲ませてスルタンの後宮に入り込んだ若い騎士のアルトゥアがはしごを使って恋人のズライマのところへやってくる。スルタンと将軍はこれに気付いてはしごを上ってくるが、アルトゥアはこのはしごを倒して2人を落下させ、若い2人は船で後宮から脱出することに成功する。スルタンははしごから落ちたときに将軍の刀で鼻を突かれ負傷してしまう。ここではスルタンはズライマからも嫌われ、はしごから転落して負傷するという滑稽な姿で示され、独裁者の権力はまったく発揮されておらず、むしろ嘲笑されている(Abb.17)。

39 Münchener Bilderbogen, Nro.439, München, Braun & Schneider.



Abb.17: MU-00439-Die Entführung aus dem Serail (Wilhelm Busch) 第11画面

ブッシュがスルタンのような権力者でも喜劇役者のように扱っているに対して、オーバーレンダーは権力者をあまりにも事大主義的に扱っているのではないだろうか。オーバーレンダーの描く独裁者のもとでは個人の自由はなく、人道的な社会への展望は絶望的である。被支配者の将来の展望がないだけではなく、オーバーレンダーの作品では権力者のスルタンも歯痛の治療を終えておらず、いつまでも歯痛を抱えたままで、何の解決もされない (Abb.18)。この

作品では設定も筋の展開もすべてが破滅的という事態である。

②絵の描写という点ではブッシュの「虫歯」は画期的である。虫歯に苦しむクラッケの姿をブッシュは最初の13コマで非常に誇張した形で示す。手足を大げさに動かし、頭を水桶に突っ込むが、圧巻なのはベッドで汗をかこうと試みるときの画像である。ベッドには5・6枚の掛布団が重ねられ、次のコマではこれらをすべて蹴っ飛ばし、歯痛が治らずに苦しむ様子がいきいきと変化をともなって描かれている (Abb.19)。後半の歯医者で歯を抜いてもらう時の連続したコマも素晴らしい出来である。歯医者はクラッケの顔ほどもある大きなドリルを持ち出し、クラッケの体を宙に浮かせるほど引っ張って歯を抜く。現実的にはありえない



Abb.18: MU-00699-Der undankbare Sultan 第9画面



Abb.19: MU-00330-Der hohle Zahn (Wilhelm Busch) 第10-12画面

と思われるような、誇張したこのような描写は読者をびっくりさせ、たいへん強い印象を与えるものである。(a) 現実から離れた、ありえないような誇張表現、(b) 前後のコマなどの対比による動きと変化の表現などが、ブッシュの描画の本質的な特徴であろう。このためこのボーゲンは説明のテキストを抜いた画像だけの版も発行されている。このようなパントマイムだけで、筋の展開を示し、読者に訴えかけることができるのは、ブッシュの持つ技法のすばらしさによるものであろう。一方、オーバーレンダーでは確かにスルタンが怒って歯医者を蹴り飛ばす場面などでは歯医者体が宙に浮き、躍動的な線が描かれているが、それぞれの場面が途切れているので、ブッシュに見られるような変化の過程が示されていない。このため躍動感がブッシュと比べると不足していると言わざるを得ない。また異化効果的な誇張した表現はほとんどなく、すべての絵が現実主義的に描かれている。

(6-3) 以上の考察を踏まえて、オーバーレンダーとブッシュの特徴をまとめておきたい。

①オーバーレンダーは19世紀後半のニヒリズムを作風の基盤とした画家だったのではないだろうか。その根拠として指摘できると思われる点は、(a) 作品に登場する人物も動物たちも、ほぼすべてが自己中心のであり、非寛容で、他人への配慮を持たず、すぐに暴力に訴える傾向があること、(b) 絶対的権力者が不動の存在であり、社会的な今後の明るい展望がないこと、(c) 多くの作品で破壊そのものが自己目的とされているような壊滅的結末を描いていること、(d) 犯罪行為の責任を

追及せず、これを軽視する傾向が強いこと、などである。

②これに対して、ブッシュは基本的に民衆の立場を基盤としており、民衆芸術家と位置付けることができよう。しかも彼の技法は多くの点で20世紀のモダン芸術を先取りしているといえる。例えばそれは、(a)前後の画面の対比などにより、静止的2次元の絵画の世界に動きや変化を与えようとしたこと、(b)「虫歯」における何重にも重ねた掛布団の描写や、「名人芸」(MU-00465-Der Virtuos)におけるように、1人の人間の手を何本も描きいれたり、指を20本描いたりすることなどによって、現実から離れたシュールレアリスム的な方法を試みたこと、(c)「喧嘩する隣人たち」(MU-00443-Die feindlichen Nachbarn)のように、同じコマや隣りあったコマに2つの部屋の様子を描き同時進行の技法を試み、未来派やダダイズムの先例を示したこと、(d)常識的な日常性をはるかに超えた誇張した表現や、唐突で意外な擬人化によって、異化効果の技法を試みたこと、などである。

以上のことから、19世紀の後半において、出口のない閉塞感が蔓延している中で、動物たちの姿に人々の自己中心主義の似姿を描いたオーバーレンダーの作品が共感を呼んだのであろうが、20世紀の新しいモダン芸術の時代になると、オーバーレンダーの素朴で現実主義的な描写方法は過去のものとなってしまった、これに対して動きや誇張を伴うブッシュのモダニズム的な作品はその後人々に受容されている、というように考えられるのではないだろうか。

Adolf Oberländer und der *Münchener Bilderbogen*

Yukihiko Usami

Adolf Oberländer arbeitete beinahe 60 Jahre lang als Zeichner fast ausschließlich für die humoristische Zeitschrift *Die fliegenden Blätter*, die von dem Verlag Braun & Schneider in München herausgegeben wurde. Er zeichnete von 1863 bis 1898 insgesamt 43 Bilderbogen, die von diesem Verlag veröffentlicht wurden. Man kann sagen, dass er zu den wichtigsten Künstlern der späten Phase des *Münchener Bilderbogens* gehört. Am Ende des 19. Jahrhunderts war er als satirischer Karikaturist so bekannt wie Wilhelm Busch und Thomas Theodor Heine. Er dürfte zu jener Zeit sogar noch populärer als Busch gewesen sein (Hans Ludwig).

In „Wie es wär’, wenn’s anders wär“ (Nro. 656) gelingt es ihm, 16 irreal humoristische Bilder zu zeichnen. Ein Elefant fliegt mit seinen kleinen Flügeln wie ein Engel, und die Hasen blasen im Feld Trompeten. Aber in diesem Werk richtet er seine Satire vor allem gegen die Menschen. Im zwölften Bild heißt es: „Wie nützlich wär’ es für den Staat, / lebt’ von der Luft der Bürokrat!“ Der Maler weist darauf hin, dass die Beamten vom Staatsapparat den Rahm abschöpfen.

In seinem Werk „Was der Mensch von Tieren gelernt hat“ (Nro. 845) vergleicht er die Menschen mit Tieren, und auch hier werden sie scharf und humorvoll kritisiert. Im 6. Bild erklärt der Text: „Auch folgt – nur etwas selbstbewußter – / oft der Student des Faultiers Muster.“ In diesem Bild liegt ein Faultier im Kleid der Burschenschaft auf dem Kanapee und raucht mit einer langen Pfeife, während die Bücher wirt durcheinander liegen.

Die Tierwelt war das Spezialgebiet dieses Zeichners. In mindestens 23 Werken seiner 43 Bilderbogen spielen Tiere wichtige Rollen. Er zeichnete seine Tiere meistens sehr realistisch. Sie handeln instinkt-

mäßig, dann führt das oftmals zu einem bösen Ende. Mitunter wirken sie selbstsüchtig, was aber für die Menschen ebenfalls gilt, die zudem schnell gewalttätig werden.

Eine genauere Betrachtung seiner Werke gibt zu erkennen, dass das Schaffen Oberländers im Grunde genommen auf dem Nihilismus des 19. Jahrhunderts basiert. Die Gründe dafür wären: (a) die Protagonisten (sowohl Tiere als auch Menschen) sind fast alle selbstsüchtig und intolerant, nehmen keine Rücksicht auf andere und üben unverzüglich rohe Gewalt aus, (b) die Macht der Herrscher wird als unerschütterlich dargestellt, normale Menschen haben keine Kraft gegenüber dem absoluten Machthaber, und optimistische Aussichten auf die Zukunft sind ausgeschlossen, (c) in vielen Werken erscheint die Zerstörung als Selbstzweck, die Handlungen der meisten Bildergeschichte enden mit Vernichtung, (d) im Fall, dass Betrüger, Räuber und Gewalttäter auftreten, wird die Kriminalität oft nicht bestraft, oder es wird darüber hinweggesehen.

Während Oberländer im Prinzip auf der realistischen Darstellungsweise des 19. Jahrhunderts bestand, entwickelte Wilhelm Busch neue Darstellungsmethoden: (a) die Darstellung der Bewegung und Veränderung durch den Kontrast oder die Aneinanderreihung zu mehreren Szenen, (b) die fast surrealistische Darstellung der extremen Übertreibung, (c) die nahezu futuristische und dadaistische simultane Darstellung zwei verschiedener Dimensionen, (d) einen Verfremdungseffekt durch plötzliche Personifikation usw. Die Werke von Busch geben Vorwegnahmen moderner Kunstrichtungen des 20. Jahrhunderts zu erkennen. So war es unvermeidlich, dass Oberländer bald in Vergessenheit geriet, während Busch zunehmend an Bekanntheit gewann.